

◆今号の内容◆

- ・ 巻頭言 「人間復興と社会包摂」
- ・ 特集 チリー-高知 被災地交流報告
- ・ 災害救援プロジェクト 近況
- ・ TOPICS—こんなこともやっています—
今年もインターンシップを受け入れました
兵庫県立大学ユースフォーラムに
参加してきました
- ・ CODE寺子屋セミナー
「今、若者に伝える、19年間の救援思想」
- ・ 会員・寄付者紹介
会員募集・ご寄付のお願い
- ・ 役員・スタッフ活動記録

CODE
Letter

2014.1.28 VOL.48

(特活)CODE海外災害援助市民センター 発行
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-578-7744 FAX:078-574-0702
E-mail: info@code-jp.org
URL: http://www.code-jp.org/
郵便振替: 00930-0-330579

「人間復興と社会包摂」(CODE副代表理事・室崎益輝)

阪神・淡路大震災から19年を迎えた。17日の早朝には、地震当日の記憶と今日までの復興の過程を追体験するために、被災地をゆっくり歩いて現地の方々と交流する、「被災地1人歩き」を今年もさせていただいた。いつものことだが、被災地を歩いていると、様々な感情がこみ上げてくる。とりわけ最近、東日本大震災の現実が折り重なって、復興が本当にこれで良かったかという感情が、私の心の中をかき回す。

いつもその時は、原点に戻らなければと言いつつも、自省的に振り返るようにしている。ところで、私にとっての原点は、言うまでもなく「人間復興」という言葉に集約される。それは「災害で傷つくのも、災害から立ち上がるのも、人間である。それ故に、1人ひとりの人間の苦しみや喜びに思いをはせ、最後の一人が立ちあがれるようになるまで、皆が力を合わせて復興をめざす」ということである。

19年を経過しても、今なお震災の傷によって苦しんでいる人がいる。被災地に戻りたくとも戻れないままに、被災地からはるか遠くで暮らしている人がいる。借り上げ公営住宅の期限が迫って追い立てを食い、生活の場を失う危機に瀕している人がいる。心身の傷をいやす社会的ケアが十分に得られないために、震災障害に苦しんでいる人がいる。復興の途上で苦しんでいる被災者、復興の道から離脱した被災者がいるという、この厳しい現実を忘れてはいけないし、なによりも目を背けてはならない。

この厳しさを解決するのは、流れゆく時間ではない。むしろ、時間は忘れさせる働きをして、人間復興の妨げになっている。この厳しさを解決し、1人ひとりに復興をもたらすのは、社会全体の思いやりであり姿勢である。ところで、この社会の姿勢に関わって、「社会包摂」という言葉が語られるようになった。被災者を社会全体で包み込んでその自立を支援しなければならないという、この言葉の持つ力は大きい。「自分の命は自分で守れ」という自己責任論が空虚な響きしか残さないのに対して、「みんなの命はみんなを守る」というこの社会包摂論は、現代社会に欠けている最も大切なものを思い起こさせてくれる。

ここでは、人間復興は社会包摂によって実現できる、ということを確認したい。私たちが掲げてきた「人間の安全保障」という崇高な目標も、復興と包摂の有機的な関係性の上にこそ成り立つ。海外の災害復興の支援においても、与える支援ではなく引き出す支援に心がけること、被災者と共に協働して自立と自治の確立をはかること、社会の責務として人類の規範として復興に取り組むことが、ますます重要になっている。これからは、我々だけが支援に必死に取り組むのではなく、世界みんなが力を合わせて支援できるような、社会包摂の大きな輪を作り上げることに心がけたい。

(室崎益輝)

特集

被災地交流報告

(吉椿雅道)

チリー高知

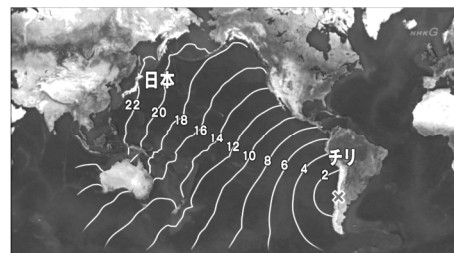
防災を通してつながる
チリと高知の学び合い

2010年2月27日、南米チリ沖でM8.8の大地震と津波が発生し、約800名が亡くなりました。その津波は22時間後に日本まで到達し、複数ヶ所で浸水被害を出しました。また、1960年の史上最大のチリ地震(M9.5)では、6.1mの津波が三陸地方を襲い、142名が亡くなりました。チリと日本は1万7000km離れた地球の反対側にあっても太平洋でつながっているのです。他人事ではないのです。

昨年12月にCODEは、現地で活動するNGO、ICAチリのイザベルさんを招聘し、南海トラフ巨大地震で被害の懸念されている高知県を訪問し、高知の防災の取り組みを学ぶと同時にチリの経験を伝えるという交流を行いました。事前に人と人がつながる事の大切さを感じる交流でした。

◎チリ地震の概要

発生日時：2010年2月27日3時34分(現地時間)
規模：M8.8(史上5番目の規模)
震源：コンセプションの北北東107km
深さ：35km 津波遡上高：最高28m
被害：死者802 総被災者：約200万人
日本への影響：久慈(岩手県)や須崎(高知県)
で最大1.2mの津波が観測された。
宮城や静岡では57棟が浸水した。



地図：NHK

◎高知県での交流(2013年12月10日~13日)

1、四万十町興津地区(12/10)

人口約1001人(549世帯)の高齢化率48%の農漁村で、南海トラフ巨大地震では、最大25mの津波が20分で来襲すると想定されています。興津地域ぐるみ防災委員会を中心に避難広場や避難タワーの新設、保育所や高齢者施設の高台移転など、先駆的な津波対策を実現しています。京都大学の矢守克也教授の協力



▲小学生が作った防災マップ

◎ゲストプロフィール

Isabel de la Maza Urrutia

(イザベル・デ・ラ・マザ)

1958年サンティアゴ生まれ。1992年から複数のNGOで社会開発や教育分野のコーディネーターを務める。

2002年よりICAチリで住民対象のワークショップやトレーニングを行っている。現在、ICAチリ代表理事。



のもと、高齢者などの個別の避難訓練も行っています。また、興津小学校の子どもたちは、防災マップなどの作成も行っており、小学生が発見した老朽化した橋が実際に耐震化されました。



▲津波避難タワー

2、高知県黒潮町（12/11）

人口 12500 人の町で、南海トラフ巨大地震の想定では、最大 34m の日本一高い津波が襲来すると予測されています。町長を筆頭に「犠牲者ゼロ」を目標に掲げ、各家族構成などを記した「避難カルテ」を基にした個別の避難計画、高台の避難広場、避難タワーの建設などを行っています。また、日本一高い津波想定を逆手にとった「毎日食べたい非常食」の開発で地域の雇用創出も考えています。町職員の方に防災の取り組みを聞いたイザベルさんは、チリ地震の際に政府からの情報の伝達不足だった事、チリでは今も仕事を失った状況が続いている事から黒潮町の個別避難カルテなど情報伝達のあり方や缶詰による雇用と防災を合わせた対策に非常に興味を持っていました。



▲黒潮町での意見交換のようす

3、高知県立大学と高知市三里地区（12/12）

◇高知県立大学、三里ふれあいセンターでの報告

防災サークルの学生や教職員を対象にイザベルさんのチリ地震の講義が行われました。津波の常襲国であるチリでも数年を経るとすぐに忘れられる事が問題である事や「NGO は話を聴いて、仕事（やる事）を与えてあげることが、精神的な回復につながる」という貴重な話を聞くことが出来ました。また、三里地区での報告会では、イザベルさんのチリ地震の報告を聞いた自治会長は、「すべてが参考になる」と言いました。被災地で起きたすべての事が未災地である三里の防災対策の事前の備えにつながるという事です。チリ地震の話聞いた住民の間で自然に議論が始まり、それを見ていたイザベルさんは、「こうやって皆で真剣に議論することが、命を守る事につながるのね」と最後に語りました。



▲高知県立大学での講義



▲三里地区での報告会



▲神戸の参加者と

◎神戸でのチリ地震報告会（12/14）

神戸市勤労会館でもイザベルさんによるチリ地震報告会を開催しました。軍や政府と NGO がどのように協働できるのか、また平時のコミュニケーションが重要性、NGO が住民の話を聴き、住民自身が発言できるようにエンパワーメントする事などが参加者と議論されました。チリでは、新しいビルが倒壊した事から人の意識の中に油断があった事が指摘され、コーディネーターの室崎副代表は、「災害を忘れてしまう」ということは、日本にも共通したもので、次世代への防災教育をどのように行っていくのかが課題であると語りました。

◎交流を終えて・・・

黒潮町を離れる時、町職員の方から「何かあったらお願いします」と言われました。今回のチリと高知の学び合いを通して、今後、もし高知で災害が起きればイザベルさんは高知で出会った人たちを想い、チリで災害が起きれば高知の人たちはイザベルさんを想い出すでしょう。この顔の見えるつながりが、国を超えた支え合いを紡いでいくのでしょうか。このご縁を大事にしていきたいと思ひます。

この事業にご協力いただいた皆様（敬称略）

矢守克也（京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授）、孫英英（京都大学矢守研）、四万十町、興津地域ぐるみ防災委員会、興津小学校、黒潮町佐賀支所、山崎水紀夫（NPO 高知市民会議理事）、高知県立大学、防災サークル「イケあい」、高知市三里地区、田代恵（通訳）

——災害救援プロジェクト 近況——

フィリピン台風30号・Haiyan (since2013/11/11)

2013年11月8日午前4時40分、台風30号（アジア名：Haiyan フィリピン名：Yolanda）はフィリピン中部のサマル島に上陸しました。台風30号は最大瞬間風速105m/秒を記録し、史上最大級の台風となり、レイテ島、セブ島、パナイ島、ネグロス島などフィリピン中部の島々に強風と高波によるたいへん大きな被害をもたらしました。フィリピン政府によると、1月22日時点で死者6,201人、負傷者28,626人、不明者1,785人、全壊家屋550,928棟、損壊家屋589,404棟の被害が出ており、死者数だけでもフィリピン史上2番目に大きな被害となりました。

CODEは発災3日後の11月11日に救援活動を立ち上げ、募金活動と情報収集を開始しました。11月15日にはCODEスタッフの頼政良太、上野智彦の2名が第1次先遣隊として被災地のセブ島、パナイ島を訪れ、調査、救援物資の配布を行いました。



▲損壊した家で暮らす被災者



▲物資配布に並ぶ住民たち

今回の台風では、レイテ島タクロバン、サマル島の被害が甚大であったために報道が集中し、他の島々の報道が非常に少なく、セブ島、パナイ島などの島でも大きな被害を受けています。全壊、損壊あわせて1,140,332棟の家屋が被害を受けており、セブ島北部やパナイ島北部で無傷の住宅はほとんど見ることはできませんでした。屋根のトタン材がめくれ、風の流れた方向に傾く家でも住めるだけいいと言うように、多くの家族がかろうじて無事な家屋に集まって暮らす姿が見られます。

レイテ島タクロバンでは食料をはじめとする必要物資が圧倒的に不足していたため、住民がスーパーなどに駆け込む略奪が起きましたが、それはごく一部のことで、やむを得ず行った行為にすぎません。セブ島の被災者は、支援物資を配る際には自ら列を作り、私たちにお礼を言いながら受け取ってくれました。被災者のすべてが略奪を行っているわけではありません。

フィリピンの被災者が求めるものとしてまず声上がるのが「家の材料」です。現地によく見られるバンブーハウス（竹の家）の材料である竹の値段が3～4倍に高騰してしまったために、家の再建ができずにいます。熱帯の気候で感染症が発生しやすいフィリピンで、家の再建は被災者の一番の懸念事項となっています。また、生活を維持する方法が失われた人たちがいます。今回の台風による高潮、強風により、多くの漁船が流され沈んでしまいました。フィリピン中部の沿岸部には漁業従事者が非常に多く、船を失った漁師は漁に出られず、収入を得る手段を失ってしまいました。それにより家を再建するお金の目途が立たず、より苦しい生活状況となっている被災者が多くいます。

その他にも本来緊急避難所として機能するはずであった学校の校舎が大きく壊れてしまったことで、次からはどこに避難すればいいかわからないという被災者もいました。また、今まで通り十分には学校に通うことができない子どもたちもいます。週に1回しか学校に通えていない子どもにも、早く毎日学校に通いたいかと尋ねると、元気よく「Yes!」と答えたことが印象的でした。

第一次派遣の調査をもとにCODEは次のようなプロジェクトを検討しています。

- ① 災害に耐えうるバンブーハウス建築方法の提案、および住宅再建のモデルハウス建設
- ② 船を失ってしまい収入を得ることができない漁師への漁船支援
- ③ 災害時の避難拠点となる学校の再建支援、及び防災教育
- ④ 現地NGOネットワークの支援

第2次派遣ではより綿密な調査やカウンターパート探しを行い、具体的なプロジェクト内容を決定します。プロジェクトの実施には更なるご支援が必要です。どうぞよろしくお願いたします。（上野智彦）

メキシコ暴風雨(since2013/9/15)

2013年9月11日から17日、メキシコでハリケーン“イングリッド”と熱帯低気圧“マニュエル”の2つの暴風雨が同時に襲い、大規模な豪雨災害・土砂災害が発生しました。内務大臣が「国土の3分の2が被災した」と発言したほどですが、日本での報道は少なくあまり注目されませんでした。被災地では衛生環境の悪化から感染症も発生しており、WHOの発表によるとこれまでに184人がコレラに感染し、うち1人が死亡しました。また、多くの家畜や農作物が水に流されたほか、土砂災害で都市部とのアクセスが断たれ、山間地域では深刻な飢餓が発生しています。特にメキシコ南部ゲレーロ州山間地域はもともと最貧の地域で、支援が届かないことによってさらに困窮しています。



▲物資を受け取る子ども
(Guerreros por la Montana撮影)

CODEはメキシコ在住の海外研究員・クワテモックさんを通して、現地の若者によるボランティア団体「Guerreros por la Montana」がゲレーロ州で行っている物資配布の活動に協力したり、子どもたちへの心のケアの支援を行っています。

(上野智彦)

○Guerreros por la Montana

今回の暴風雨をきっかけに生まれた若者グループです。スペイン語で「山の戦士たち」という意味のこのグループは、暴風雨被災地への政府の支援が山間部には届いていないことから、土砂崩れによりゲレーロ州山間部に取り残されている被災者の避難のサポートや食糧や冬物衣料の配布を開始しました。

彼らはプエブラ市とトラパ市に拠点を置き、出稼ぎでアメリカに住む友人や親戚のサポートを主に受けています。ゲレーロ州はアメリカへ出稼ぎにでる人が多く、故郷を支援したいという気持ちが“Guerreros por la Montana”を支えています。

四川大地震(since2008/5/13)

農家楽のワークショップを開催 !!

CODEによって建設された光明村の「老年活動センター」は、現在、住民によって農家楽（農家レストラン）として運営されていますが、集客や住民参加型に至っていないことなどの課題を抱えています。そこで昨年10月、北京の農家楽の専門家である王橋先生（中国社会科学院）をお呼びし、住民を対象にしたワークショップを開催しました。

王先生は、日本に留学経験もあり、北京や貴州で農村の貧困問題など研究しておられます。今回、北京のたった一人の女性が、様々な軋轢を乗り越えて信頼を勝ち取って農家楽を成功していったお話や住民の力を如何に活用していくかが先生から語られました。

約40名の参加者は、自分たちに何が出来るのだろうかかと真剣な表情で聞いていました。会終了後、村長は合作社（日本の協同組合のようなもの）を作る事を約束し、これにより住民が運営にかかわり易くなると思われま。参加した住民のL（50代女性）さんは、「あんな風にやれたらいいわね」と言うと、王先生は「あなたみたいな元気な人がメンバーに入らないと！」と鼓舞していました。

まだ課題の多い「光明村老年活動センター」ですが、あれこれ言いながら皆で少しずつ創りあげていく事を願っています。このワークショップは確実にその一歩となりました。（吉椿雅道）



▲ワークショップの様子

○農家楽

都市部の住民が休日などを利用して郊外の農村を訪れ、郷土料理やお茶を味わいながら娯楽に興ずるレジャー。四川省の成都が発祥であり、近郊にある1万軒の施設には、週末になると約50万人もの人々が訪れています。

ハイチ (since2010/1/13)

2010年1月12日で震災から4年を迎えたハイチでは、今も約17万人の方が306ヶ所の避難キャンプでテント暮らしをしています。CODEは地震直後から支援を行ってきましたが、昨年（2013年）から新たに、レオガンという地域のNGO「GEDDH」（「ハイチの持続可能な発展のためのエコロジーグループ」）らが計画してきた農業技術学校の建設をサポートしています。昨年7月に着工して基礎の工事が進みましたが、土地契約の確認や銀行口座の開設などに時間がかかっており、本格的な工事はこれからになります。今年の早い段階での完成を目指しています。

ハイチでは、植民地支配や圧政による貧しさから、人々が山の木を切って暮らしの糧にせざるをえなかった歴史があります。そのため山が荒れ、大雨が降ると土砂崩れが起きたり、農地としても適さなくなってしまう、食糧危機の問題も深刻です。GEDDHのメンバーの多くは農家で、地域の人たちと植林に取り組んできました。「植林によって豊かな土地を回復し、自分たちの食べ物をつくれる国にしたい。そのために技術を多くの人に伝えたい」——そんなハイチの人たちの願いを引き続き一緒に応援してください。（岡本千明）



▲ 農業技術学校ETALの看板

アフガニスタン (since2002/7/17)

2003年から皆さまにご支援いただいているカブール州北部のミールパチャコットのぶどう農家が育てたレーズンを日本でも食べていただけるよう、現在商品化を進めています。現地では、従来最大の輸出先であったパキスタンへの流通が困難になり、せっかく作ったぶどうが売れない状況が続いています。CODEでその販路を肩代わりできるわけではありませんが、このレーズンをきっかけにもっと多くの方にアフガニスタンのことを知っていただき、支援の輪を拡げたいと考えています。慣れない手続きに現地カウンターパートが我慢強く付き合ってくれたおかげで、12月末に 20kgのレーズンを販売用に輸入することができました。

これから熊本市の「日本フェアトレード委員会」の協力で再乾燥やパッキングを行い、試験的に販売用パッケージができる予定です。本格的に販売できるようになりましたらご報告させていただきます。ぜひ楽しみにお待ち下さい。（岡本千明）



▲レーズンになるぶどう

青海省 (since2010/5/14)

2010年4月14日に起きた中国・青海省地震。死者2698人、行方不明270人、被災者約24万人という被害を出しました。CODEは、現地のNGOやボランティアと連携して被災地の支援、調査を行い、チベット人にとって重要な家畜であるヤクを提供し、繁殖させることで生計を立て直してもらおう「ヤク銀行」を2012年に開始しました。

現地の僧侶、遊牧民、獣医、芸術家（インドネシア人）などから作る「ヤク銀行委員会」からの情報によると、提供されたヤクは、最も貧しい地区の遊牧民の家族に提供されています。着実に成長している子ヤクがいる一方で、病気などで亡くなる子ヤクも出ているそうです。標高4000mのチベットの過酷な環境で遊牧民の人たちも試行錯誤で頑張っています。今後もヤク銀行を温かく見守っていただけたらと思います。（吉椿雅道）



▲子ヤクの世話をする遊牧民の女性

コラム

日本とアフガニスタンの深い関係

アフガニスタンは中央アジアに位置する内陸国です。しかし日本と同じアジアに属しながらも、旅行などの観光で訪れることはほぼ無く感覚的に遠い国でもあります。現在は飛行機を使えばドバイ(UAE)やデリー(インド)、イスラマバード(パキスタン)を経由して14~18時間かかります。このように心理的にも物理的にも遠い国であるアフガニスタンですが、この2つの国の関係は遙か昔から存在しました。それをつな

ぐものがシルクロードです。シルクロードは西はローマから東は日本の正倉院まで続く巨大な交易路で、アフガニスタンはシルクロードの重要な交易点でした。日本とアフガニスタンはシルクロードを通じてつながっており、その証として奈良の高松塚壁画のうち「飛鳥美人」という人物画から、当時はアフガニスタンからしか産出しなかったラピスラズリという宝石を使用した青色塗料が見つかっています。（上野智彦）